

2023年活動報告

国内外の交通社会の変化やニーズに合わせた活動を展開

2050年に全世界でHondaの二輪・四輪が関与する交通事故死者ゼロをめざし、Honda安全運転普及本部は2023年も「人から人への手渡しの安全」と「参加体験型の実践教育」を基本に交通社会の変化やニーズに合わせ、活動を展開した。

先進の安全運転支援システムの正しい理解の普及を海外へ広げる

Hondaは「Honda SENSING」と総称する先進の安全運転支援システムの標準装備化を進めている。

日本だけでなく、海外でも「Honda SENSING」を搭載した車両が増えているが、使い方を正しく理解していないお客さまも少なくない。安全に機能を活かしていただくためには正しい使用方法や知識も普及することが必要である。そこで、9月、鈴鹿サーキット交通教育センターでアジア・大洋州地域6ヵ国（ニュージーランド、フィリピン、インド、ベトナム、韓国、インドネシア）の現地法人の安全部門責任者を対象に研修会を実施した。

まずインストラクターが運転する車両に参加者が同乗し、衝突軽減ブレーキ（CMBS）を体験してもらうことで、各機能の能力には限界があり、機能の能力を過信せずに、安全運転することの重要性を伝えた。その後、参加者自身が運転し、機能の能力を過信しない安全運転の大切さを体感してもらった。

さらに、参加者が自国で体感試乗会を実施するための準備や運営方法について説明。参加者同士で交互に指導者役とお客さま役になり、効果的な安全アドバイスをするためのロールプレイングを行った。

2024年もその他の現地法人に対して、同様の研修会を実施していく予定である。



参加者自ら運転し、衝突軽減ブレーキ（CMBS）の作動を体感



座学では「Honda SENSING」の作動原理などを解説

小学校の先生方による継続的な指導をサポートする教材などを開発

Hondaの教育プログラムを用いた小学生（1～6年生）への交通安全教室の効果検証を実施したところ、受講直後には歩行状態の改善や、横断歩道通行での手上げの増加、道路への飛び出しの減少が見られたものの、時間の経過とともに受講前の状態に戻る傾向が見られ、教育効果を維持するには継続的な指導が必要であるということがわかった。そこで、Hondaは年に数回実施される交通安全教室だけでなく、日常的に継続した教育が可能となるよう、小学校の朝の会や、帰りの会などの時間を使って指導ができる教材を検討。小学校の先生方に意見をうかがいながら、短時間で手軽に繰り返し教育を行え、子どもたちが楽しみながら安全な行動を意識できるような教材として「Honda交通安全かるた」をデジタル化した教育教材「デジタル交通安全かるた」を開発した。

また、自転車利用者向けの新たな教材として「自転車の安全な道路の走り方」も開発（P8参照）。2024年1月から普及を開始する予定だ。



「Honda交通安全かるた」は、子どもたちに覚えてほしい交通ルールやマナーを45の絵札と読み札でわかりやすく紹介した教材。「デジタル交通安全かるた」は、これをデジタル化したもの。パソコンやタブレット端末を通じて、モニターやスクリーンに絵札を表示。その絵札が表している交通ルールなどについて児童に考えてもらった上で、読み札を表示させて、絵札の意味することに気づいてもらう。絵札はアニメーションになっており、この機能を使って、様々な交通場面における安全行動も理解してもらえるようになっている。詳細は以下のホームページ参照。
https://global.honda.jp/safetyinfo/digital_karuta/



短時間で手軽に繰り返し教育を行える教材として小学校の先生方に活用されている

多くの人に交通安全について考えてもらうための情報発信

「人から人への手渡しの安全」を活動の基本としているが、さらに時代変化にも即した対応を図るべく、ウェブサイトやSNSを通じた情報発信を拡充している。

春・秋の全国交通安全運動に合わせて、Hondaの全事業所、グループ企業、お取引先、二輪・四輪販売会社が自ら交通参加者の一員として一体となり運動をリードすべく「Safety Japan Action（セーフティジャパンアクション）」を展開。2023年秋は「高齢歩行者をまもれ！」をテーマに、Hondaの交通安全啓発キャラクター できるニャンと、お笑いタレント・ムーディ勝山さんが登場するスペシャルサイトを開設し、『「右から」道路を横断する高齢歩行者との交通事故に『関心』を持ち、お互いに『尊重』し合い、自ら『安全行動』を起こす機会となるよう積極的に啓発を展開した。

また、YouTubeでHondaの交通教育センターのインストラクターによる「いんすとradio」を定期的に配信し、ライダー向けにツーリングに行く際に注意してほしいポイントなどを視聴者の日常シーンに寄り添いながらアドバイスしている。

さらに、2023年は交通安全の領域でトヨタと連携を開始。その第一歩として、両社のウェブサイトで互いの交通安全の取り組みを紹介し合った。トヨタのウェブサイトではHondaの「交通安全を楽しく学ぼう～道路のキケン、発見～」(動画KYT)、Hondaのウェブサイトではトヨタの「シートベルトシメルンジャーの歌」(シートベルト着用啓発ソング)が閲覧できるようになっている。



“高齢歩行者をまもれ！”をテーマに展開した「Safety Japan Action 2023年秋」のスペシャルサイト



2023年から配信を開始したHondaの交通教育センターのインストラクターによる「いんすとradio」



トヨタのウェブサイトで紹介されているHondaの「交通安全を楽しく学ぼう～道路のキケン、発見～」
https://www.toyota.co.jp/jpn/sustainability/social_contribution/safety_activities/



Hondaのウェブサイトではトヨタの「シートベルトシメルンジャーの歌」を紹介
<https://global.honda.jp/safetyinfo/child/child06.html>

医療機関向け新型ドライビングシミュレーターを発売

運転復帰をめざすリハビリテーション加療中の方の運転能力の評価をサポートするドライビングシミュレーター「DB型 Model-A」を発売。これは2021年にモデルチェンジした安全運転教育用「Hondaドライビングシミュレーター」に、簡易型四輪ドライビングシミュレーター（Hondaセーフティナビ）用に販売しているリハビリテーション向けソフトを実装したものである。Hondaセーフティナビに対し、実車同様の部品を数多く採用したことにより、運転操作に必要な手足の複合的動作を実際のクルマを運転しているような感覚で体験することができ、医療機関におけるリハビリテーションプログラムへの活用を想定している。

この「DB型 Model-A」に加え、Hondaの交通教育センターで提供している実車訓練「自操安全運転プログラム」を通じて、リハビリテーション加療中の方の安心・安全な運転復帰に貢献することをめざしている。



「DB型 Model-A」。43型フルHDの液晶モニター3台で立体感のある映像を表現。ステアリングやシート、ペダルは実車相当のものを採用している



リハビリテーション向けソフトは運転反応、危険予測体験、環境別走行体験、急制動体験、総合学習体験、運転操作課題などのプログラムからなり、認知・判断に対する適応性やアクセル・ブレーキ操作の反応速度などを測定。それらの測定データを数値化することで、運転能力をより客観的に比較・評価できるようになっている

日本運転リハプロジェクトと連携し、運転能力評価の考え方や手法を普及

Hondaは、高次脳機能障がい等でお身体が不自由になった方がリハビリテーションを経て運転を再開しようとする際の地域病院施設における運転能力評価プロセスの構築をサポートしている。2014年に四国地方で病院施設と連携し、四国運転リハプロジェクトを立ち上げた。同プロジェクトでは、地域性や病院施設の規模にかかわらず実施できる手法として停止車両評価（写真参照）を考案し、四国地方の病院などへの普及を進めた。

このような取り組みを全国に展開するため、同プロジェクトを全国規模の日本運転リハプロジェクトへと発展拡大し、活動を継続している。

2023年は、作業療法士等一人当たりが患者を抱える比率の高い東北・北関東エリアの8県（青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県、茨城県、栃木県）で開催。日本運転リハプロジェクトのシニアアドバイザー 岩佐英志さんとともに、運転能力評価の考え方や停止車両評価の具体的な手法を受講者に体験を通して気づいてもらえるよう実施した。石巻ロイヤル病院（宮城県石巻市）では、この研修を8月に受講した同病院作業療法士の安室遼之さんと高橋佳世さんが中心となって停止車両評価を患者の運転能力評価に取り入れている。安室さんは「受講前は止まっているクルマで何が評価できるのかイメージできませんでした。しかし、実際に体験してみて、視野や車両感覚など従来の検査やシミュレーターではわからなかった部分を明らかにできると感じました」と振り返る。高橋さんは「必要なのはクルマ1台とポールという私たちの手の届きやすい評価方法で、明日からでもすぐにできると思いました」と話す。

二人は停止車両評価を同病院の運転班（患者の運転を支援するチーム）で共有し、研修の受講から1ヵ月たたないうちに実践。12月末時点で14人の患者に停止車両評価を行っている。停止車両評価を体験した70代の患者に感想を聞くと、「退院してからクルマが運転できるか、ずっと不安でした。止まっているクルマでしたが、実際にハンドルやアクセル、ブレーキを操作したり、車両感覚を確認したりすることで、運転を再開することへの自信が持てるようになりました」と答えてくれた。

同病院では、2023年から石巻市内にある自動車教習所との連携もスタートさせている。「教習所をはじめ他の機関の方々へ、高次脳機能障がいをお持ちの方の運転能力評価への理解を徐々に深めていただくことで、地域での支援環境が整っていくことを願っています。石巻に限らず多くの地域では生活していくのにクルマの運転が必要とすることが多くあります。まず私たちの病院で運転再開へのプロセスを確立し、宮城県、東北地方へと拡げていきたいと考えています」と二人は力強く語った。

2024年も日本運転リハプロジェクトとHondaは、全国各地で運転能力評価方法の考え方や手法を一人でも多くの病院施設の方々へお届けできるよう研修を継続していく考えだ。



石巻ロイヤル病院作業療法士の安室遼之さん（左）と高橋佳世さん（右）



停止車両評価は患者に停止状態のクルマの運転席に座ってもらい、運転に必要とされる能力を評価するもの。クルマへの乗降、運転姿勢、ハンドルやブレーキの操作力といった運転基本操作とともに視野や車両・位置・距離などの運転基礎感覚を確認する



車両感覚を評価する時は目印になるポール（棒）を停止車両の前後左右から近づけ、車体の前方および後方の右端・左端にポールが来たとき認識したら手を上げてもらうことで「目安値を大きく外れていないか」「左右で差が顕著に見られないか」チェックする

第53回全国白バイ安全運転競技大会の審判業務に協力

全国白バイ安全運転競技大会（主催：警察庁）は、白バイ乗務員の運転技能を向上させるとともに、士気の高揚を図り、道路交通の安全維持に資することを目的に1969年より実施されている。

2023年は10月7日から9日にかけて、自動車安全運転センター安全運転中央研修所（茨城県ひたちなか市）で開催され、45都道府県警察及び皇宮警察の147名（男性99名・女性48名）の白バイ隊員が出場。トライアル走行操縦競技、バランス走行操縦競技、不整地走行操縦競技、傾斜走行操縦（スラローム）競技の計4種目（女性の部はバランス走行操縦競技と傾斜走行操縦競技の計2種目）によって熱戦を繰り広げた。

Hondaは大会の審判業務にも協力し、運営をサポートしている。開催に先立ち安全運転普及本部のスタッフが、審判を務める警察官と競技規則に則って、審査基準の整合会を実施し、全員が厳正公平で正確なジャッジを行えるよう意思統一を図った。



第53回全国白バイ安全運転競技大会の傾斜走行操縦（スラローム）競技



想定される走行に対し、競技車両を使いながら全員が正確にジャッジできるよう審査基準の確認と整合を行う